1. 鳥越村と別宮地区の概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4960

1．鳥越村と別宮地区の概要

鹿　野　勝　彦

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．鳥越村
Ⅲ．別宮地区
Ⅳ．おわりに

Ⅰ．はじめに

金沢大学文学部文化人類学研究室では、2001年度の調査実習を、石川県石川郡鳥越村の別宮地区において実施した。本報告書はこの調査実習への参加者が分担執筆した各章より構成されており、当研究室の調査実習報告書としては17冊目のものとなる[1)]。

2001年度の調査実習は、対象地区を1996年度以来5年ぶりに加賀地方に移したが、対象とする地域の単位のとりかたは1999年度以降の方針を継続し、複数の、立地条件や規模が相当に異なる集落を含む旧村の範囲を対象とし、20名近い参加者が全員で地区そのものの性格をあきらかにするという課題に取り組むという形をとった。これには過去2年間の経験から、集落を越えた地区としてのまとまりに注目することで、集落の範囲にこだわっていては見落としかねないさまざまな問題があきらかになること、地区内の相互に共通性と相違とをあわせもつ集落間の比較がそれ自体として興味深いテーマになりうることなど、調査そのもののありかたに関するいくつかの積極的な理由とともに、対象地区における個々の集落の規模や、さらには指導するスタッフと学生の人数の関係といった実習の実務にかかわる理由まで、いくつかの要因があったが、個々の集落を対象とする場合と比較すればいずれにも長短があり、今年度の方針は便宜的に決めたものにすぎない。

予備調査から本調査、補充調査を経て報告書作成に至る過程については、2001年度も従来のそれをほぼ踏襲しているので、ここには繰り返さない[2)]。

ただ、これも例年のことであるが、調査実習に参加した学生は、最終的には個々の関心に基づいてテーマを選択し、執筆しているので、それらの全部を合わせても対象地区の全体的、網羅的な記述にはなっていない。そこで本章では鳥越村と別宮地区の概要について、以下の各章の記述を読み取るうえで最小限必要と思われる背景説明としての、立地、人口の動態、生業の変遷等についての一般的な記述をしたうえで、村と地区の特徴について若干の検討を

行う。

本章で使用したおもな資料は、『石川県鳥越村史』(1972年刊行)のほか、国勢調査、農業センサスおよび調査時点での村役場の統計、広報誌等であるが、『村史』の刊行がかなり以前であり、その後の状況の変化も著しいものがあるので、むしろ直接の聞き取りによる部分が大きい。

II. 鳥越村

鳥越村は石川県南部の石川郡西部に位置し、白山を源とする手取川中流の左岸とその支流である大日川、堂川流域とを、その村域とする。東は手取川をはさんで、上流から尾口村、吉野谷村、河内村、鶴来町と、西と南は大日川を囲む標高800～1,100m前後の山々を境界として小松市と、そして北は標高500m前後の山をはさんで能美郡辰口町と接している。村域はおよそ75㎢であるが、そのおよそ80%は山地が占め、平地は北部の手取、大日両川が合流したあたりの河岸段丘部を除けば、ごく限られる。

村域は加賀地方のなかでも、いわゆる白山麓の豪雪地に位置し、特に本調査の直接の対象となった南部の別宮地区は、比較的暖冬が続く近年でも、平野部に比べればかなり多量の降雪を見る。かつて1963(昭和38)年や1980(昭和55)年の豪雪に際しては、被害も大きく、それはその後の村や地区の変化の動向にもさまざまな影響を与えた。

村の北部から東部にかけて、すなわち手取川の左岸には、かつては金沢と名古屋を白山越えの鉄道で直接結ぶという壮大な構想のもとで建設された北陸鉄道金名線が、金沢の野町駅から鶴来町を経由して鳥越村域を河原山の白山下駅まで走っていたが、1970年代以降は交通事情の変化によって村域内の運行本数が削減され、1979年からは実質的にバス輸送に切り替わった。現在の主要な交通路は手取川左岸の県道80号線、大日川沿いの県道79号線および79号線から村の南部を小松市へ抜ける県道9号線であるが、手取川沿いの幹線はむしろ右岸の国道157号線であり、県道80号線とはいくつかの橋で結ばれている。公共交通機関は手取川沿い、大日川沿いとも若干のバスが運行されているものの、便数はわずかであり、村が曜日を定めて代行バスを運行しているが、主要な交通手段は自家用の車輌である。

ただこういった道路網の整備や自家用車の普及が進んだのは比較的近年のことであり、かつては同じ村域のなかでも、例えば手取川沿いの吉原地区と大日川沿いの別宮地区の往来は、かなりの時間を要したし、現在でも自分で車輌を運転しない(出来ない)高齢者や高校生以下の人々にとっては、公共交通の撤退は深刻な問題である。

行政的には現在の村域は1907(明治40)年に北部の河野村(当時8集落、現9集落)、大日

川沿い南部の別宮村 (13 集落)、手取川沿い南部の吉原村 (7 集落) が合併して形成され、以後変わっていない。これらの旧村域は、地形的にも立地条件のうえでも相互にかなり異なっており、そのことは過去数十年の人口の動態や生業のあり方の変化などにも反映されているが、また現在も村内の地区としてのまとまりを維持していて、村の運営などにも一定の役割を果たしている。このうち別宮地区については節を改めて記述するので、ここではまず鳥越村全体の人口の動態、生業構造の変化等に関する基礎資料を提示したうえで、河野地区、吉原地区についてその特徴を略述する。

表 1 は鳥越村と各地区の世帯数と人口の動態を、表 2 は表 1 をもとにそれぞれにおける世帯規模の平均の変化を、また表 3 は村の人口の年齢構成の変化をまとめたものである。このうち表 1 の 2001 年の数値は資料の性格がやや異なるので注意を要するが[3]、これらからは村の世帯数、人口が過去 70 年に渡って減り続けており、特に人口の減少が著しいこと、よって世帯の平均人数も一貫して減り続けていること、また子供の占める比率が減り高齢者の比率が増え続けていること等がわかるが、その実態は地区によってかなり異なっている。すなわち北部の河野地区においては、この間、世帯数はほぼ安定しており、人口の減少比率も他地区に比べれば少ない。世帯数、人口とも減少がもっとも著しいのは別宮地区で、吉原地区の数値はいずれも両者の中間にある。

表 1　鳥越村と各地区の世帯数、人口動態

年　度	鳥越村		河野		別宮		吉原	
	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
1915(大 4)	−	6678	−	2190	−	2672	−	1816
1930(昭 5)	1134	5800	337	1820	472	2282	325	1698
1965(昭 40)	1060	5244	377	1869	367	1773	316	1602
1970(昭 45)	976	4351	370	1717	307	1214	299	1420
1975(昭 50)	928	3904	362	1580	268	990	298	1334
1980(昭 55)	886	3566	346	1462	250	900	290	1204
1985(昭 60)	858	3421	335	1402	244	885	279	1134
1990(平 2)	849	3379	341	1431	233	838	275	1110
1995(平 7)	820	3256	330	1386	226	797	264	1073
2001(平 13)	881	3277	382	1476	221	733	278	1068
残存率	72.3	56.1	97.9	76.2	47.9	34.9	81.2	63.2

出所: 1915、1930 は『鳥越村史』、1965〜1995 は国勢調査、2001 は村役場資料
残存率は、1930 の数値を 100 とし、1995 の残存比率を示す

表２　鳥越村と各地区の平均世帯人数の変化

年　度	鳥越村	河　野	別　宮	吉　原
1930	5.11	5.40	4.83	5.22
1970	4.46	4.60	3.95	4.75
1980	4.02	4.23	3.60	4.15
1990	4.00	4.20	3.60	4.04
1995	3.97	4.20	3.53	4.06

出所: 表１に同じ

表３　鳥越村の年齢階梯別人口構成比率の変化

年度　年齢	比率		
	0 ～ 14	15 ～ 59	60 ～
1920	38.5	48.7	12.8
1930	39.8	48.4	11.8
1950	36.0	51.0	13.0
1960	33.6	51.8	14.6
年齢	0 ～ 14	15 ～ 64	65 ～
1980	18.1	65.9	16.0
1990	17.0	61.2	21.8
2000	14.9	54.8	30.3

出所: 1920～1960 は『鳥越村史』、1980～2000 は村役場資料

また表４は鳥越村の就労者数の、産業分類別の変化をまとめたものであるが、ここからは 1960 年代以降の第１次産業の急速な衰退と 1960 年代後半以降の第２次産業の延び悩み、そして第３次産業への依存の増加を見て取れる。

河野地区は鳥越村の北部にあって、集落は手取、大日川の河岸段丘上に立地し、村内では比較的農業立地や交通の便に恵まれた地区であり、水田の他、かつては葉たばこの産地としても知られていた。また地区内には小規模ながら撚糸、織物の工場が多く、さらに地区南部には手取温泉が、また西部には陶石鉱山があるなど、多様な就業の場も存在した。近年はこれらの地区内の産業は、住民の就労の場としてさほど大きな意味を持っていないが、一方では交通事情の改善によって金沢への通勤圏となったうえに、地価も比較的安いため、分譲住

表4　鳥越村の産業分類別就労者数の変化

年　度	第　1　次		第　2　次		第　3　次		合計
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数
1920	2998	87.3	266	7.7	170	5.0	3434
1950	2838	83.7	202	6.0	350	10.3	3390
1960	2083	67.0	522	16.8	502	16.2	3107
1965	1550	49.4	945	30.1	643	20.5	3138
1975	560	25.0	963	43.0	714	32.0	2237
1990	406	21.0	782	40.4	748	38.6	1936
1995	343	19.2	689	38.6	753	42.2	1785

出所: 1920～1965は『鳥越村史』、1975～1995は村役場資料

宅の建設などが進められてきた。こういった事情が、この地区の世帯数、人口の安定の背景にあると見てよいように思われる。

吉原地区の各集落は村の南東部の手取川左岸の河岸段丘上に位置し、やはりかつては水田の他、集落によっては葉たばこ生産、養蚕、畜産、炭焼き、製材などさまざまな第1次産業が重要な生業であったが、ここでもそれらのいずれも1960年代には衰退し、今日に至っている。ただここでも鉄道の存在や、その後の道路整備によって村外への通勤が容易になったことなどが、人口の流出に多少とも歯止めをかけたと見ることが出来そうである。

この両地区に比べて、別宮地区は世帯数、人口とも減少の度合いが著しく、この約70年で世帯数は半数以下、人口はほぼ3分の1に減っている。次節ではこの過程を、地区内の集落レベルでの資料を確認しながら、検討する。

Ⅲ. 別宮地区

1. 地区の概要

別宮地区は村の南西部の大日川、堂川の流域に位置する別宮(べっく)、別宮出(べっくで)、杉森(すぎもり)、神子清水(みこしみず)、渡津(わたづ)、左礫(ひだりつぶて)、三ツ瀬(みつせ)、数瀬(かずせ)、阿手(あて)、五十谷(ごじゅうたに)、柳原(やなぎはら)、野地(のうぢ)、相滝(あいだけ)の13集落から構成される。

表5はこれらの集落の世帯数、人口の動態を、表6は表5をもとに算出した平均世帯人数

表5　別宮地区各集落の世帯数、人口動態

年度	別宮		別宮出		杉森		神子清水		渡津		左礫		三ツ瀬		数瀬		阿手		五十谷		柳原		野地		相滝	
	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
1876(明 9)	39	214	33	181	31	185	58	335	42	209	49	234	6	26	18	89	67	323	28	158	29	156	17	93	36	204
1915(大 4)	−	279	−	179	−	209	−	316	−	182	−	249	−	60	−	99	−	380	−	167	−	153	−	105	−	294
1930(昭 5)	58	230	26	161	31	126	45	218	28	161	55	276	6	24	15	60	94	425	27	145	28	157	19	89	40	210
1965(昭40)	66	288	25	108	26	132	36	190	25	127	35	129	6	25	10	32	60	398	15	43	22	83	9	46	32	172
1970(昭45)	64	272	24	104	26	121	34	172	22	96	31	108	7	13	11	27	25	76	7	15	12	35	9	23	35	152
1975(昭50)	55	228	23	88	25	112	32	146	23	82	25	74	6	13	9	18	21	60	6	12	8	20	4	7	31	130
1980(昭55)	52	214	22	89	26	111	31	136	21	75	25	61	5	9	9	16	21	53	3	5	4	6	2	4	29	121
1985(昭60)	57	237	21	95	26	115	31	133	20	66	20	49	4	5	8	12	20	53	2	3	4	8	2	4	29	105
1990(平 2)	55	230	21	89	26	115	29	132	19	66	19	40	5	6	8	12	16	34	2	4	3	5	2	4	28	101
1995(平 7)	56	220	20	79	25	105	29	132	19	63	18	36	5	7	5	8	16	32	2	3	3	7	2	4	26	101
1999(平11)	56	220	18	71	26	108	29	127	20	58	20	41	6	7	5	8	16	31	0	0	3	4	2	3	25	101
2001(平13)	56	216	17	66	26	98	30	119	18	54	19	38	5	6	5	7	16	28	0	0	3	4	1	2	25	95
残存率	96.6	95.7	76.9	49.1	80.6	83.3	64.4	60.6	67.9	39.1	32.7	13.0	83.3	29.2	33.3	13.3	17.0	7.5	7.4	2.1	10.7	4.5	10.5	4.5	65.0	48.1

出所: 1876〜1930は『鳥越村史』、1965〜1995は国勢調査、1999は『鳥越村村勢要覧』、2001は村役場資料
残存率は表1に同じ

表6　別宮地区各集落の平均世帯人数の変化

年度	別宮	別宮出	杉森	神子清水	渡津	左礫	三ツ瀬	数瀬	阿手	五十谷	柳原	野地	相滝
1876	5.49	5.48	5.97	5.78	4.98	4.78	4.33	4.94	4.82	5.64	5.38	5.47	5.67
1930	3.97	6.19	4.06	4.84	5.75	5.02	4.00	4.00	4.52	5.37	5.61	4.68	5.25
1970	4.25	4.33	4.65	5.06	4.36	3.48	1.86	2.45	3.04	2.14	2.92	2.56	4.34
1980	4.12	4.05	4.27	4.39	3.57	2.44	1.80	1.78	2.52	1.67	1.50	2.00	4.17
1990	4.18	4.24	4.42	4.55	3.47	2.11	1.20	1.50	2.12	2.00	1.67	2.00	3.61
1995	3.93	3.95	4.20	4.55	3.32	2.00	1.17	1.60	2.00	1.50	2.33	2.00	3.88

出所：表5に同じ

表7　別宮地区各集落の世帯：人数別の分布と比率（2001年4月）

集落名	別宮		別宮出		杉森		神子清水		渡津		左礫		三ツ瀬		数瀬		阿手		五十谷		柳原		野地		相滝	
人　数	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率
1	2	3.6	4	23.5	5	19.2	1	3.3	8	44.4	10	52.6	4	80.0	3	60.0	8	50.0	0	−	2	66.7	0	0	4	16.0
2	13	23.2	4	23.5	3	11.5	9	30.0	4	22.2	3	15.8	1	20.0	2	40.0	5	31.3	0	−	1	33.3	1	100	4	16.0
3	10	17.9	1	5.9	4	15.4	7	23.3	0	0	4	21.1	0	0	0	0	2	12.5	0	−	0	0	0	0	4	16.0
4	13	23.2	0	0	5	19.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	−	0	0	0	0	3	12.0
5以上	18	32.1	8	47.1	9	34.6	13	43.3	6	33.3	2	10.5	0	0	0	0	1	6.3	0	−	0	0	0	0	10	40.0
合計	56	100	17	100	26	100	30	100	18	100	19	100	5	100	5	100	16	100	0	−	3	100	1	100	25	100

出所：村役場資料

表８　別宮地区各集落の世帯：類型別の分布と比率（2001 年４月）

集落名	別宮		別宮出		杉森		神子清水		渡津		左礫		三ツ瀬		数瀬		阿手		五十谷		柳原		野地		相滝	
世帯類型	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率
単身	2	3.6	4	23.5	5	19.2	1	3.3	8	44.4	10	52.6	4	80.0	3	60.0	8	50.0	0	−	2	66.7	0	0	4	16.0
夫婦	12	21.4	4	23.5	3	11.5	9	30.0	4	22.2	3	15.8	0	0	1	20.0	5	31.3	0	−	0	0	1	100	4	16.0
２世代	22	39.3	1	5.9	8	30.8	7	23.3	2	11.1	4	21.1	1	20.0	1	20.0	2	12.5	0	−	1	33.3	0	0	7	28.0
３世代以上	20	35.7	8	47.1	10	38.5	13	43.3	4	22.2	2	10.5	0	0	0	0	1	6.3	0	−	0	0	0	0	10	40.0
合計	56	100	17	100	26	100	30	100	18	100	19	100	5	5	5	100	16	100	0	−	3	100	1	100	25	100

出所：村役場資料

２世代は核家族、３世代以上は直系家族で上の世代の欠損を含む

表９　別宮地区各集落の産業分類別就労者数（1960 年）

集落名	別宮		別宮出		杉森		神子清水		渡津		左礫		三ツ瀬数瀬		阿手		五十谷		柳原		野地		相滝	
産業分類別	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率
第１次	51	36.4	43	60.6	57	62.6	67	65.7	50	64.9	52	53.6	34	73.9	77	70.0	42	97.7	60	87.0	25	86.2	59	59.0
第２次	12	8.6	11	15.5	17	18.7	12	11.8	23	30.0	37	38.1	9	19.6	29	26.4	1	2.3	7	10.1	3	10.3	25	25.0
第３次	77	55.0	17	23.9	17	18.7	23	22.5	4	5.2	8	8.2	3	6.5	4	3.6	0	0	2	2.9	1	3.4	16	16.0
合計	140	100	71	100	91	100	102	100	77	100	97	100	46	100	110	100	43	100	69	100	29	100	100	100

出所：『鳥越村史』

表10　杉森と左礫の農家、農業の変化

杉　森

年度	世帯数	農家		専・兼業別数			兼業形態			平均経営耕地面積(a)			請負い農家数	請負せ農家数	林家数	保有山林面積(ha)
		数	比率	専	1兼	2兼	常雇	臨時	自営	田	畑	樹園				
1960	29	27	93.1	1	18	8	12	8	6	—	—	—	—	—	—	—
1970*	26	24	92.3	0	4	20	22	14	0	50.0	6.7	0.4	—	1	23	85
1975	—	24	—	0	0	24	22	0	2	44.3	7.9	0	0	0	23	147
1980	26	25	96.2	1	0	24	21	2	1	50.2	7.0	0	0	19	24	152
1985	—	25	—	1	0	24	21	1	2	51.8	7.2	0	2	19	24	152
1990	26	21	80.8	1	0	20	14	4	2	57.4	3.8	0.9	1	16	20	146
1995	—	14	—	1	1	12	10	0	3	66.2	6.5	0	0	9	14	123

左　礫

1960	36	33	91.7	1	6	26	8	12	12	—	—	—	—	—	—	—
1970*	28	24	85.7	0	2	22	13	10	1	16.3	9.5	0	—	4	24	789
1975	—	18	—	1	0	17	7	10	0	17.6	5.3	0	0	0	18	564
1980	24	15	62.5	6	0	9	4	4	1	19.5	6.7	0	0	0	—	—
1985	—	14	—	7	0	7	5	1	1	12.2	9.2	0	0	11	14	402
1990	13	7	53.8	3	0	4	2	2	0	10.9	6.3	0	0	7	1	1
1995	—	7	—	1	3	3	3	3	0	11.0	8.3	0	0	7	1	1

出所: 農業センサス

＊兼業農家数と兼業形態の合計は一致しないが原資料のまま

の変化を、また表7と8は2001年における各集落の世帯の、人数別、類型別の数値をまとめたものである。さらに表9は1960年時点での、集落ごとの産業分類別の就労者数を、表10は別宮地区のなかで、対照的な傾向を示す2つの集落の農家と農業に関する数値をまとめている。これらの基礎資料を参照しながら、この地区とそれを構成する集落の特徴について、見てゆく。

地区の北部では、大日川、堂川の合流点の南に相滝、合流点付近から北の右岸沿いに上流から、神子清水、杉森、別宮出、別宮の各集落が、近接して立地している。このあたりでは標高は200メートルほどあるが、右岸の段丘上には広々とした水田が広がっていて、ゆたかな農村の景観を見せている。とはいえ現在見るようなこういった農村集落の姿は、比較的近年進んだ圃場整備後のものであり、これらの集落がもともと農業だけで生活を支えていたわけではない。すなわちこれらの集落のあいだにも、それぞれに独自の個性があったのであり、例えば別宮は村の成立時から今日まで役場がおかれているほか、警察の駐在所、郵便局、保育所、農協(JA)、銀行といった村の主要な公共施設や各種機関が集中し、またかつては村内でもっとも多くの商店が軒を連ねていた、いわば村の中心集落であった。よってその住民の中には農業以外に商業、サービス業等の従事者がかなり多かったとされる。また神子清水、相滝は、かつては相滝紙の名で知られる和紙の産地であり、集落内の大部分の世帯は、農業のかたわら、なんらかの形で和紙の生産に携わっていた。

これらの集落においては、集落間で多少の差はあるが、全体としては世帯数にせよ人口にせよ、過去の約70年の間を見れば、地区の平均値よりはかなり高い比率で維持されており、相対的には過疎化はそれほど進んでいるわけでないように見える(表5参照)。このことはこれらの集落を構成する世帯個々が、現在でもある程度の人数を維持していることとも関係しよう(表6、7、8参照)。

大日川、堂川の合流点から大日川を南へ、ついで南西へ遡ると、渡津を経て、左礫、三ツ瀬、数瀬、阿手の各集落へ至る。最奥の集落である阿手においても標高自体は300メートル程と、それほど高いわけではないが、渡津を過ぎると谷幅は狭まり、耕地は狭隘で集落の規模が小さくなるとともに、集落間の間隔も開いてくるため、いかにも生活条件の厳しい山村という雰囲気が強まってくる。たしかに左礫より上流部に位置する集落は、現在では戸数が少なく各世帯の小規模化も進んでいることなど、典型的な過疎化の様相を、表5～8からもあきらかに見て取れるが、そのことは集落で出会う住民の高齢化が著しいこととともあいまって、その印象を強めている。

また相滝から堂川とその支流である野地川を南西に遡った谷沿いに位置する柳原、五十谷、野地の各集落においては、過疎化というより、この20年のあいだにもともとの住民はほとんど転出し、現在ではむしろ地区外から有機農業の場を求めて転入してきた若干の世帯など

が住んでいることで、かろうじて廃村化を免れている状態である。

さらに左礫と三ツ瀬の中間で大日川右岸に流入する杖川沿いには、1970年前後までは、白峰村方面より春から秋の間だけやって来て小屋をかまえ、焼畑耕作をおこなう人々がいたというが、現在ではその集落の跡地を確認することも困難な状況である。

だがこれらの集落も、かつては山村的集落として葉たばこ栽培や養蚕といった畑作中心の農業のほか、林業、特に製材業、薪炭生産などがさかんに行われ、集落規模も今日の状態からは考えにくいほどの規模を持っていた。また阿手は1800年代末に集落地域内での銅の試掘が開始されてから、1910年の隣接する小松市側の尾小屋鉱山への統合を経て、1962年に閉山するまで、地区内ばかりでなく、外部から転入したかなりの数の鉱山労働者の世帯を含む大規模集落であったし、その後も1960年から1967年にかけて集落のすぐ南で行われた大日ダムの建設工事の影響を受け、また鉱山跡地に建設された鳥越高原大日スキー場が1970年に開業すると、一時期は相当数の民宿などが営業するなど、変化に富んだ歴史を持つ特異な性格の集落である。

しかし今日の地区を全体としてみると、個々の集落の独自性は薄れてきており、北部の、相対的には世帯数、人口をある程度維持している農村的な集落群(別宮、別宮出、杉森、神子清水、渡津、相滝)と、南部の、過疎化が著しい山村的な集落群(左礫、三ツ瀬、数瀬、阿手、五十谷、柳原、野地)とに分かれているように見える。以下では大略この区分にしたがって資料を見てゆく。

2．農村的集落

まずここで言う農村的集落の例として杉森の場合をやや細かく見てゆこう。杉森においては、世帯数も人口も過去70年ほどの間、比較的安定している(表5)。集落を構成する世帯のほとんどは農家であり、その比率は1990年時点でも全戸数の80%以上を占めるが、実は専業農家はもともと極めて少なく、大部分の農家はなんらかの兼業を行っていた。しかしその兼業が主たる収入をもたらすようになる、すなわち2種兼業農家化するのは、1960年代以降のことである。このころには一方で道路の整備が進み、他方では若年層の高学歴化もあって、農家成員、とりわけ若年層の都市部への通勤賃金労働者化が進行していった。いいかえれば、ここでは集落に住み続けたまま実際は農業から離れ、都市郊外の住宅地に住む通勤労働者としてのライフスタイルをとることが可能になったといえる。反面、冬期を主とする出稼ぎや地区内での自営的兼業は、1970年代以降、比重を減らしている(表9、10)。

1980年代に入るとそれらの農家の大部分は、農作業の大部分をJAや少数の専業農家等に委託する、いわゆる請け負わせ農家となった。農業を続ける目的も、収穫物の販売によって収入を得ることよりも、自家飯米をはじめとする自家消費分の確保や、転出した子供などへ送ることなどを主とするようになるし、親の代から受け継いだ田を自分の代で絶やすわけ

にゆかないという理由を真っ先にあげるケースも珍しくなくなっている。だが、このように生業としての農業の位置付けが低下した現在でも、個々の農家が所有する耕地面積や、あるいは林家数、山林の保有面積などの数値においても、後述する山村としての左礫に比べれば、ずっと安定している。

こういった集落のあり方は、それを構成する世帯のあり方ともある程度対応している。すなわちここでは世帯の平均人数も、1970年代以降さほど変化していない(表6)。ただより細かく見てゆくと、全世帯のなかで30%ほどは、単身ないし夫婦のみによって構成される世帯が占めており、これらは実際上は下の世代の成員が転出したため、現在は後継者が同居していない高齢者のみの世帯である。杉森の場合、このような世帯の出現は比較的最近のことであり、それはここ10年の急激な農家数の減少とも関係があると思われる(表5、7、8)。その背景に農林業の地位の低下や高学歴化にともなう就業可能性の拡大などの結果としての若年層の農林業離れ、都市部への転出等があるとすれば、このような変化は、さらに多くの世帯で今後進行してゆく可能性があると考えざるを得ない。いいかえれば、ここでは後継者のいる世帯といない世帯への分化が進んでいるのであり、今後の推移については現段階では予測が困難である。

農村的集落の例として杉森を取り上げて見てきたが、そこで見られる傾向は、他の農村的な集落においても、程度の差はあれ、かなり共通しているように思われる。

3．山村的集落

次いで山村的集落の例として、左礫を取り上げて見てゆく。ここは山村的集落の中では、現在もっとも多くの世帯数、人口を維持している集落であるが、それでも過去約70年の間に、世帯数は3分の1以下、人口に至っては7分の1以下に減少している(表5)。また世帯当たりの平均人数も現状では2.0人であり、全世帯の3分の2以上が単身ないし夫婦のみからなる世帯で、そのほとんどが高齢者のみで構成される世帯である(表6、7、8)。こういった典型的な過疎への過程は、1960年代から1980年代にかけて急速に進行し、以後は転出する者はすでに転出した状態で安定したように見えるが、今後この過程がさらに進めば、すでに他のより小規模な集落でおきたような、実質的な廃村化にいたる可能性もないとは言えない。

生業面から見ると、左礫はもともとほとんどが農家であったとはいえ、1960年の時点でも、専業、1種兼業農家は全戸のうちの5分の1を占めていたにすぎない。すなわち集落を構成する世帯の5分の4は主に農外収入によって生活していたことになるが、たしかにここでは農家1戸あたりの耕地経営面積、とりわけ水田の面積は、杉森の場合と比べても4割足らずであり、農業だけで生活してゆく基盤そのものが存在していなかったことがうなずける。個々の就労者の従事していた職業の分類から見ても、農業従事者はその2分の1強でしかな

かった。反面、山林の所有面積は大きく、材木や薪炭の生産など、林業への依存の度合いはずっと大きかった(表9、10)。

左礫住民の農業以外のおもな仕事の内容は、林業の他、集落内の製材所や阿手の鉱山、あるいは1960年に工事が開始された大日川ダムの現場労働などで、したがって実際の就労の場も、そのほとんどは集落内ないしは地区内であった。だがこういった状態は、1970年代以降、一方でいわゆる燃料革命の影響や外材輸入の増加にともなう木材価格の下落などによる林業の衰退、他方で地区内での大型事業の終了(尾小屋鉱山は1962年閉鎖、大日川ダムは1967年完成)によって、大きく変わってゆく。

たしかに地区内にも阿手の鉱山跡地に1970年に開設された村営鳥越高原大日スキー場のような、新しい雇用の場がなかったわけではないが、それも季節雇用にすぎないといった問題もあり、結局おもな雇用の場は地区外に求めざるを得ないことになってきたのである。しかし自家用車の普及、道路の整備等が進みつつあったとはいえ、1970年代当時のこの地区の山村部集落においては、農村部集落に比べて、金沢や小松などへの通勤には、なおかなりのハンディキャップがあったため、都市部に職を得た若年層の住民は次々と集落を離れてゆき、集落には上の世代の人々が残される形となっていった。もっともこれらの転出者のかなりの部分は金沢市あたりまでの範囲に住むことが多かったので、出身集落との間を比較的ひんぱんに往来し、残った上の世代の成員をサポートすることも可能であったが、それでも上の世代が高齢化により自立して生活することが困難になれば、下の世代に引き取られる形で、事実上転出してゆき、集落の世帯数自体も減少してゆくことになった[4)]。

こういったプロセスは山村部集落におおむね共通しているが、ここでは集落間の間隔もかなり離れているだけに、個々の集落の戸数がある程度(およそ5～6戸)以下になると集落そのものの存続が困難になり、廃村化しかねない状態に陥るようである。

4．地区、集落およびその住民と外部との関係

ところで、いうまでもなく別宮地区やそれを構成する各集落、そこに住む世帯やその成員それぞれは、もともと孤立した単位として存在していたわけではなく、さまざまなかたちで外の地域と関係を結び、生活を営んでいた。このことは鉱山があった阿手や和紙の生産をおこなっていた神子清水、製材が重要な生業であった左礫などではより明瞭な形をとっていたわけだが、それ以外にもかつて地区内のかなりの数の世帯、個人が北海道やさらには中国東北部(いわゆる満蒙)へ移住を試みたといったことにもうかがえる。だがその関係が持つ意味は、すでにある程度明らかなように、近年では地区外への就学や就業、あるいは県や国といった上部の行政への依存などといった形で、いよいよ比重を増してきたといってよい。

別宮地区は、鳥越村のなかでも旧別宮村の範囲の開発を主目的として大日川流域開発期成同盟を形成し、その範囲出身の村会議員、各区長、各種組合の責任者等を中心に地区内の意

見を取りまとめ、村や県といった上部の行政への働きかけ、対応の窓口としているが、そのこと自体が、すでに地区が独自では有効な事業の主体とはなりにくいことを意味している、といってよいかもしれない。たしかに鳥越村においては、かつては旧村ごとに、あるいはその内部にも複数の、小学校(ないし分校)がおかれるなど、地区がある種の単位性を持っていたことなどを背景に、異なる地区の住民間で一定の対抗意識が存在したこともあり、現在でも地区間のバランスは、村レベルでの組織や事業のありかたにおいては、なにかと問題になる。

だが近年では、人口の減少、交通事情の改善等を背景に、学校や高齢者福祉施設など村を単位とする各種の施設の統合や新設が進み、またかつては地区レベルで組織、運営されていた子供会、青年団といった団体においても、しだいに村のレベルでの活動に重点が移ってきたように見える。一般にどの地域でも住民の自治活動として大きな意味を持つ祭礼について見ても、もともと鳥越村では集落がその実施の主体であり、地区レベルでの祭礼は存在しなかった。そして1988(昭和63)年からは、行政の主導で、村を単位としたイベントとしての「一向一揆祭り」が始まったことに示されるように、旧村単位の地区が持つ意味はしだいに薄れ、村としてのまとまりへの指向性が強まってきた。

こういったなかで、最近になって、石川郡を構成する町村の広域合併の構想が、現実味を帯びてきている。白山麓の町村の間では、以前より、行政レベルや、民間の、特に商工会のレベルなどで、さまざまな広域組織、あるいは共同事業、活動などが行われてきており、その内容も消防、防災、葬祭、高齢者福祉、観光、スポーツ・イベントなど多岐にわたっているが、それらは一方で、行政単位間で競合する面もあって、常に充分な協力態勢のもとで行われてきたわけでもない。広域合併が今後どのように進展するかを予測することは、ここでの検討の範囲を超えるが、その地区、集落レベルへの影響も含め、注目してゆきたい。

一方、もともといわゆる自然村としての性格を持つ各集落(区)は、現在でも区長をはじめとする独自の役員組織と財政基盤を持ち、自治単位として祭礼をはじめとするさまざまな活動、事業を行っており、一般的にはその機能は衰えていないように見える。特に農村部の集落の中には、成員のかなりの額の負担のもとに集会所を増改築したり、祭礼にさまざまな新しい要素を取り入れたりするなど、積極的な運営、活動を行っているところもある。しかし過疎化、小規模化が進んだ山村的集落の多くでは、すでに区の運営はかなり困難な状態にあり、同じ人が長期間役員を務めざるを得ない、祭礼を相当に簡略化せざるを得ない、といった事態も生じている。

ただいずれにせよ、集落を構成する住民、とりわけ地区外に職を持つ50歳代以下の年齢層の人々の多くにとっては、生活の主たる場は集落の外部にあるのであり、集落の運営やそこでの活動は、どちらかといえば負担を感じながらやむを得ず参加する、といった性格のも

のになりつつある。そこで集落の運営の中心は、必然的に定年等で職を退いた、比較的高齢の人々にゆだねられる傾向が強くなる。ただ、そういった高齢者への依存がいつまで可能であるかも、今後は次第に深刻な問題となりかねない。

個々の世帯のレベルにおいては、すでに述べたように、村に残った成員と、村外といっても比較的近距離の地域へ転出した成員との、日常的で密接な関係を前提として、前者の生活が支えられるという傾向が、今後の住民の高齢化の一層の進行とともに、強まってくるように思われる。

別宮地区においては今後も、例えば河野地区でのように、分譲住宅の建設等によって、他の地域から多くの定住人口の流入があるとは、考えにくい。とすれば、さまざまな形態での交流人口の増加を目指すのも、一つの考え方であろうが、そのためには、インフラの整備ばかりでなく、いわゆるソフト面での開放性が課題となってくるのかもしれない。

いずれにせよ地区や村が抱えている問題を解決し、今後の発展をはかってゆくためには、当面する問題への直接的、対症療法的手段とともに、長期の展望に基づく体質改善の手法が必要になろうが、とりわけその後者においては、今後、地区や村が外部との関係をどのように構築してゆくかが問われることとなろう。

私たちの調査自体においても集落や地区と外部との関係を問題とする以上、地区の内部で行う調査で得た資料のみに頼っていては不十分なことは自明であるが、本調査実習の性格上、地区外、とりわけ村外での調査には限界もあり、ここではこの問題の本格的な検討は、今後の課題としておく。

IV. おわりに

本報告書も例年のことながら、はじめて実地調査を経験する学生の報告を主とするものであり、指導者の能力の限界もあって、全体として不十分な内容になったが、以下の各章が扱うテーマは、目次からもわかるように、地区住民の地域の自然とのかかわりや満蒙開拓の記憶の現在における意味など、従来の報告書のそれと比べても、かなりの幅の広がりをみせている。長期にわたる繁雑な調査に根気強くおつきあいを頂いた各位にはこころより御礼申し上げるとともに、忌憚のないご叱正、ご批判をお願いする次第である。

注

1） 既刊の調査実習報告書の一覧は巻末の「参考文献・資料」にまとめてある。

2） 具体的には1999年度の報告書『富来町地頭町』1999、P.1-2を参照されたい。

3） 2001年の数値は住民台帳によるもので、地区内に常時は住んでいない人々を一定程度含んでおり、必ずしも実際の世帯数、人口の増加を意味していない。

4） 左磯では1980年代以降、専業、1種兼業農家の比率が高まったように見えるが(表10)、実際にはそれまで通勤賃金労働をしていた成員が定年等で退職したことにともない、見掛け上の専業化が生じたにすぎない。